佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第16集

中金井遺跡群

A RATA　KAMIKANAI

荒田・上金井

栗毛坂遺跡群

HIGASHIAKA ZA

東赤座 II

長野県佐久市小田井荒田・上金井遺跡，岩村田東赤座遺跡第2次発掘調査報告書

1989

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例　　言

1　本書は、長野県佐久市土木課による昭和62年度市道５－２号線道路改良事業、市道赤座線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　調査委託者　　佐久市土木課

3　調査受託者　　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4　発掘調査所在地籍及び面積

中金井遺跡群荒田・上金井遺跡（略号ＮＡＫ）

佐久市大字小田井字荒田 885 －1、889 －1、889 －5、上金井 1209 －1、 1210 －1。1863 ㎡

栗毛坂遺跡群東赤座Ⅱ遺跡（略号ＩＨＺ）

佐久市大字岩村田字東赤座3734－３、3735－６・７・８、3736－2、3738－３、3740、3741、3742－１・３、3769、3770　　3 585 ㎡

5　調査期間

荒田・上金井遺跡

昭和62年９月28日～10月１日、11月14日～12月１日、12月２日～昭和63年３月23日

東赤座Ⅱ遺跡

昭和62年11月27日～12月15日、昭和63年12月16日～３月23日

6　調査団の構成

事務局　　佐久埋蔵文化財調査センター

所　　長	西沢正巳	調査係主任	高村博文
庶務係主査	畠山俊彦	調　査　係	三石宗一
庶　務　係	田中芳美（臨時職員）		小山岳夫

荒田・上金井遺跡調査団

団　　長　　黒岩忠男（佐久考古学会副会長）

調査指導者　　林　幸彦・羽毛田卓也（佐久市教育委員会）

調査担当者　　三石宗一、小林真寿

調査補助員　　神部妙子

協　力　者　　金沢花子、小林幸子、平林美津江、森泉欽一、森泉好治、和久井義雄（佐久考古学会員）（五十音順）

地形・地質・石質指導　　白倉盛男（佐久考古学会副会長）

東赤座II遺跡

団　　長	黒岩忠男
調査指導者	林　幸彦・羽毛田卓也
調査担当者	高村博文
調査主任	篠原浩江
協力者	平林美津江、宮川百合子、和久井義雄

7　本書の編集は、荒田・上金井遺跡を小林真寿が、東赤座II遺跡を篠原浩江が行なった。執筆は、荒田・上金井遺跡第II章を白倉盛男が担当し、他の章については小林が行ない、東赤座II遺跡については、すべて篠原が行なった。

8　本書および荒田・上金井遺跡、東赤座遺跡出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

荒田・上金井遺跡において荒田区長高橋次男氏、高橋徳松氏、また、東赤座II遺跡において長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所をはじめ地元の方々には、発掘調査中、数々のご協力およびご援助をいただき、さらに報告書作成にあたって下記の各氏よりご指導・ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

宇賀神誠司、臼田武正、河西克造、小平恵一、小林秀行、近藤尚義、島田恵子、堤　隆、寺嶋俊郎、花岡　弘、福島邦男、丸山敏一郎、百瀬忠幸、森泉かよ子、由井茂也

（敬称略　五十音順）

目　　次

例　言

第1編　荒田・上金井遺跡

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第1節　発掘調査に至る動機……1

第2節　調査日誌……1

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第1節　自然環境（地形と地質）……3

第2節　遺跡の歴史的環境……5

第Ⅲ章　基本層序……9

第Ⅳ章　遺構と遺物

第1節　検出遺構・遺物の概要……10

第2節　溝状遺構……10

1）　第1号溝状遺構…10　2）　第2号溝状遺構…14　3）　第3号溝状遺構…15

第3節　土　　坑……15

1）　第1号土坑……15

第4節　遺構外出土遺物……16

第Ⅴ章　調査のまとめ……17

引用参考文献・写真図版

第2編　東赤座Ⅱ遺跡

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第1節　発掘調査に至る動機……27

第2節　調査日誌……28

第Ⅱ章　遺跡の環境

第1節　栗毛坂遺跡群付近の自然環境（地形と地質）……29

第2節　遺跡の歴史的環境……30

第Ⅲ章　基本層序及び概要……32

第Ⅳ章　遺構と遺物

第1節　土　　坑……36

第2節　耕作土出土遺物……36

第Ⅴ章　調査のまとめ …… 37
引用参考文献・写真図版

挿　図　目　次

荒田・上金井遺跡

第1図　荒田・上金井遺跡の発掘区……3
第2図　浅間山の形態と構造……4
第3図　黒斑山東部の破壊によって生じた「泥流」および流下した状態を示す図……5
第4図　周辺遺跡分布図……7
第5図　基本層序模式図……9
第6図　荒田・上金井遺跡全体図……11
第7図　第1号溝状遺構実測図……13
第8図　第2号溝状遺構実測図……14
第9図　第3号溝状遺構実測図……15
第10図　第1号土坑実測図……16
第11図　遺構外出土縄文土器実測図……16
付　図　金井城跡曲・溝址配置図

東赤座Ⅱ遺跡

第1図　栗毛坂遺跡群東赤座Ⅱ遺跡の位置……27
第2図　周辺遺跡分布図……30
第3図　東赤座Ⅱ遺跡第1・2調査区基本層序模式図…32
第4図　東赤座Ⅱ遺跡第2調査区基本層序模式図……33
第5図　東赤座Ⅱ遺跡の地形及び発掘区設定図……34
第6図　東赤座Ⅱ遺跡遺構全体図……35
第7図　第1号土坑実測図……36
第8図　耕作土出土遺物実測図……36

写　真　図　版　目　次

荒田・上金井遺跡

図版　一　　荒田・上金井遺跡全景
図版　二　1　第1号溝状遺構
　　2　第1号溝状遺構セクション（A－A′）
　　3　第1号溝状遺構セクション（B－B′）
図版　三　1　第2号溝状遺構
　　2　第1・2号溝状遺構
図版　四　1　第3号溝状遺構
　　2　第3号溝状遺構セクション（A－A′）
図版　五　1　第1号土坑
　　2　遺構外出土縄文土器

東赤座Ⅱ遺跡

図版　一　1　東赤座Ⅱ遺跡遠景
　　2　第1地区第1トレンチ
　　3・4　第1地区第2トレンチ
　　5　第2地区第3トレンチ
　　6　第2地区第4トレンチ
図版　二　7　第1号土坑
　　8・9　第2地区第3トレンチ
　　10・11　第2地区第5トレンチ
図版　三　12　東赤座Ⅱ遺跡遠景
　　13　第2地区第4トレンチ
　　14　第2地区第6トレンチ
　　15　第2地区第7トレンチ

第1編 荒田・上金井遺跡

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第1節　発掘調査に至る動機

中金井遺跡群荒田・上金井遺跡は佐久市北端部小田井地区に所在し、湯川右岸の標高 750 m ～ 780 m を測る台地上に立地する。同台地の東端部には金井城跡が存在し、湯川との比高差は約40 m を測る。遺跡群は佐久市遺跡詳細分布調査によって、弥生時代～中世にかけての複合遺跡であることが知られている。

昭和62年度佐久市土木課による緊急地方道路整備事業（市道５－２号線道路改良）が本遺跡内で計画され、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、緊急に発掘調査し、記録保存する必要が生じた。そこで、佐久市教育委員会が市土木課より委託を受け、佐久市教育委員会からの委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行う運びとなった。

第2節　調査日誌

9月28日(月)　宅地移転予定地78坪の表土を重機により削平する。

9月29日(火)　発掘区全体図の作成、土層観察トレンチセクション図作成。発掘区北端部に検出された黒色の落ち込みを半裁した結果、倒木痕であることが判明する。

9月30日(水)　記録作業の未終了部分を完了させ、宅地移転予定地の調査を終了する。

10月１日(木)　調査区を重機により埋め戻す。午前中で終了する。

11月14日(土)　重機による表土削平作業を開始する。調査区の約$\frac{1}{2}$を終了する。

11月16日(月)　重機による表土削平作業を終了する。調査区東端部より幅約３m の溝址と思われる落ち込みを検出し、サブトレンチを入れた結果底部分に砂の堆積を確認し、Ｍ１とする。

11月20日(金)　機材の搬入・テントの設営を行う。本日より協力者３名を加える。Ｍ１の掘り下げを行う。

11月21日(土)　Ｍ１完掘。出土遺物皆無。Ｍ１東側で、ほぼ平行して走る溝址Ｍ２の掘り下げを行う。

11月24日(火)　Ｍ２完掘。調査区西端部の精査を行う。

11月25日(水)　新たに協力者2名を加える。M1精査後平面図を作成する。レベル原点を759 mで設定する。

11月26日(木)　M1・2セクション図作成。M2平面図作成。D1セクション図作成後完掘。全体図作成・全景写真撮影を終了し、荒田・上金井遺跡調査区西半分の調査を完了する。

11月27日(金)　重機による表土の削平、遺構検出。

11月28日(土)　重機による表土の削平、遺構検出。溝址1条（M3とする）、倒木痕と思われる落ち込み2基を検出する。

11月30日(月)　M3完掘後、セクション図を作成。倒木痕と思われる落ち込みにサブトレンチを設定し、掘り下げた結果倒木痕である事を確認。

12月1日(火)　M3平面図、全体図の作成、全景写真の撮影を終了し、荒田・上金井遺跡調査区東半分の調査を完了する。

12月2日(火)～昭和63年3月23日(月)　報告書作成作業を行い全調査を完了する。

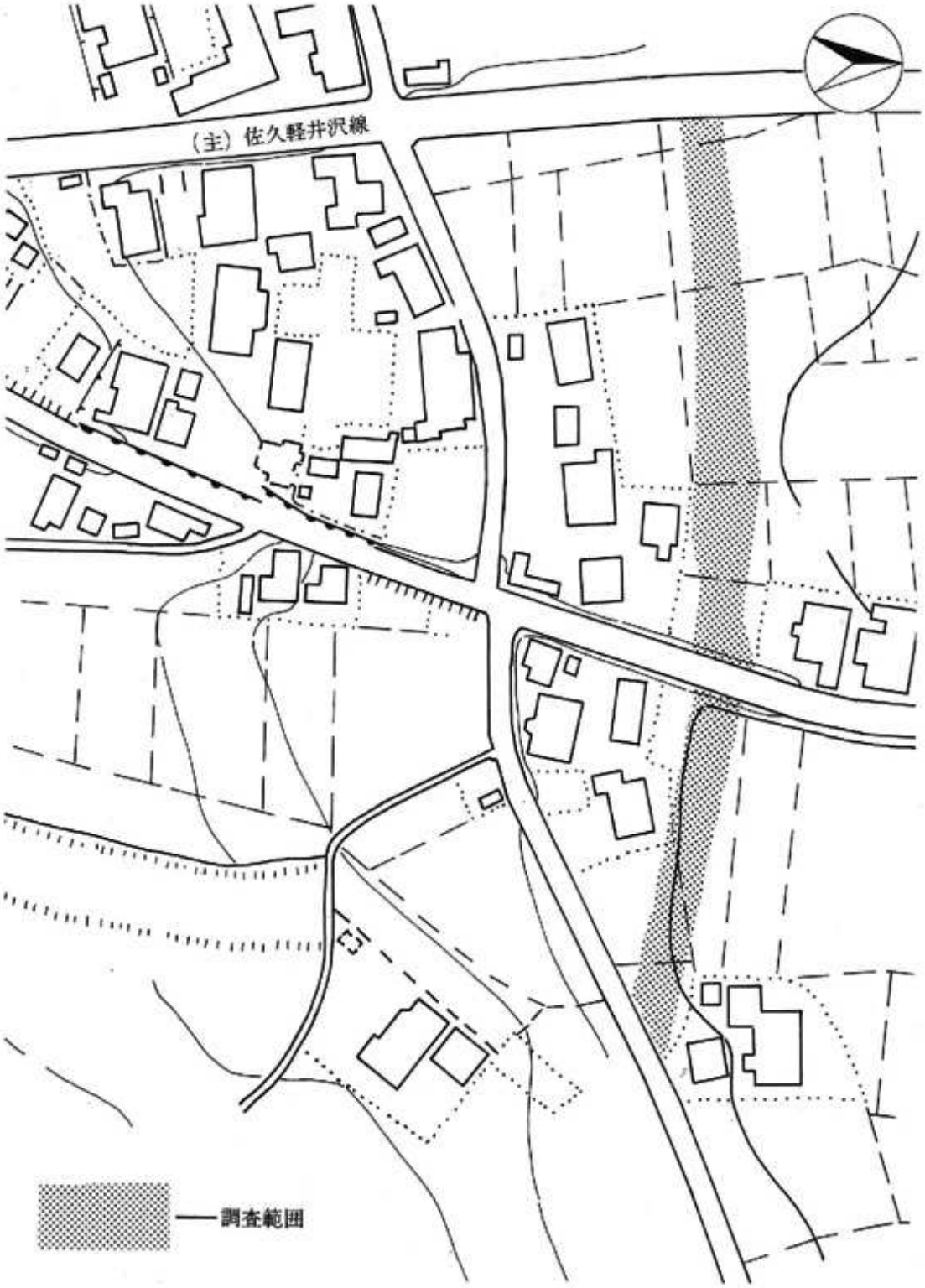
第II章　遺跡の立地と環境

第1節　自然環境（地形と地質）

この遺跡は佐久市の最北端の中金井遺跡群と小田井部落の境に位置している。この附近一帯は北方にそびえている浅間山の噴出物によって地質構成されている地帯で、この地域環境を記載するには先づ浅間山の構成からはじめなければならない。

浅間山は群馬県境の上信越高原国立公園の最南端にある火山国日本の中においても珍らしい代表的な活火山で現在も盛んに噴煙を上げていることで知られている。それに加えて研究史の長いこと、火山活動の記録が古くから残されていること、火山形態が各面から具備していることなどにもよりわが国東西交通の要路中仙道・信越線沿いにあり、活動している火山として時に大噴火をして周辺に災害を及ぼすこともあり、四季の風望の変化のすばらしさなどによって古来文学絵画の対象ともなり多くの作品も残されている。

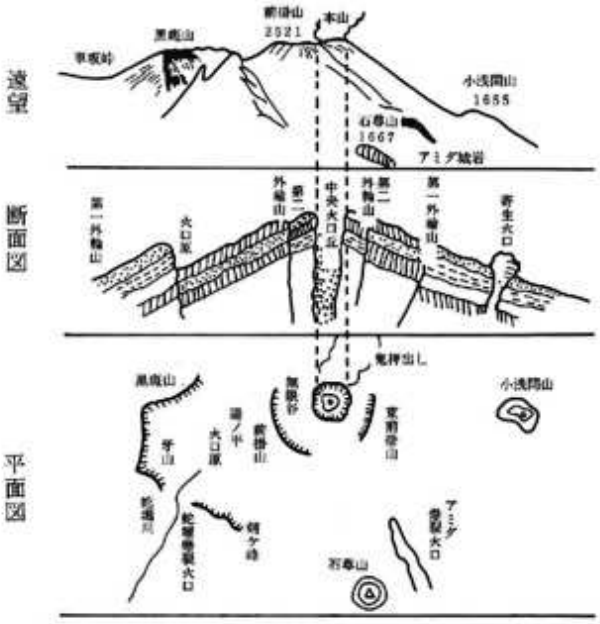
浅間山は黒斑山・前掛山・中央釜山の三重式成層火山で標高2560.m、四方からの眺望の変化もあり、しかも常に噴煙を続けているので人目につき易いが特に南方佐久市側から見渡す形態が実にすばらしい。火山構造も含めて図示したものが第2図であるがコニーデ型の裾野と三重式噴火口寄生火山火口瀬など火山の模形を見るようである。しかも噴煙は上空の偏西風によって東に傾



第1図　荒田・上金井遺跡の発掘区　(1：1.250)

くことが多いため大噴火による災害も南側には及ばないのが現状である。

しかし長い火山活動の歴史をたどって見ると南方佐久市側にも噴火の状況を語る噴出溶岩火山灰火山砂礫の推積層が多く残されている。浅間山はわが国の火山としては最も新しい若い火山で第1次黒斑火山の活動を開始したのが新生代四紀洪積末期であるが黒斑火山最盛期には単式成層火山で標高2800mを越える大型火山であった。その整然とした大火山は噴火口の東半分以上を破壊する大爆発によって山体を失ってしまった。その時の噴出溶岩熱水泥流の大部分が主として南方に流下して佐久市中佐都附近まで押出している。その推積物は現在JR中佐都駅附近を中心として塚原、赤岩、平塚部落附近の田園地に散在する松島湾に浮ぶ松島のように並んでいる泥流残丘である。



第2図　浅間山の形態と構造（白倉原図）

基盤整備以前はその数100を越す大小残丘が浅間山頂方向から放射状に並んでおり地名の起原にもなっていた。岩質の研究結果から黒斑岩壁に残っている岩石と同一であることが実証されている。

その破壊された黒斑火山の中心から再び活発な火山活動が再開されたのが前掛山に成長するわけであるがその過程の長い期間の多量な噴出物である火砕流軽石流（熱火山灰砂軽石）と降下火山灰砂が二回に亘って佐久市北半部に厚さ20cm以上に推積した。これは浅間山南面追分原以南・佐久市中込原・西端は小諸市懐古園附近まで広範囲223km²にわたって分布して佐久平北半部の生活地表面を形成して第一・第二軽石流と呼ばれている。（第一軽石流をP_1・第二軽石流をP_2と命名されている。）

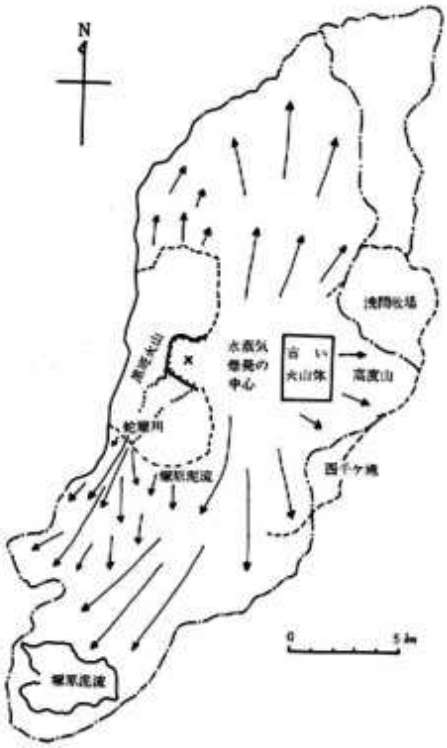
この軽石流は一時湯川を埋め一部に湖沼状態も作り湿地水中推積層も各地に作り、浅間火山山麓凹凸地形面を平坦化した。この大規模な第一軽石流と小規模な第二軽石流の間には100年以上の間隔があったらしく20cm内外の黒土層を挟んでいる所もある。

この軽石流P_1P_2の地表面が佐久市北半部を形成しているが、この地層は火山から噴出したままの火山灰砂軽石の推積したままのもので凝固していないために水の浸蝕には頗る弱く豪雨洪水に

は極めて大きな地形変化を受ける。従ってこの地帯には火山山麓特有な“田切り”の地形が発達している。最大なものとしては湯川の谷をはじめとして浅間山麓に深い田切りの谷が50余発達しており山麓湧水地下水の流下通路となっておりこれが古代からの稲田耕作をささえている。

浅間山麓標高1000ｍ内外に分布する湧水（湧玉・濁り・白糸・千ケ滝）火口瀬蛇堀川などの浸蝕作用がこれをつくったわけである。湯川の谷も田切りの最大なものと見ることができる。浅間山麓には田切りの深い谷はその数合せて50を越えている。本遺跡の東側湯川の断崖面で厚さ約25ｍが計られた。これが、今迄調査された最大値である。田切りは山麓湧水地下水の流下流路ともなっており、弥生時代以来この周辺標高 750ｍ以下の稲田耕作をささえてきたと考えられ、田切りの分布と遺跡分布の古い集落分布には極めて深い関係が見られる。

中金井遺跡群は東南二面は湯川の断崖にかこまれ、西面は濁川とその分流の深い天然の谷に守られた自然の要害の地として、戦国攻防の要地として、築城の効を見ぬいて金井城が作られたものであろう。その烟眼に敬服せざるを得ない。



第３図　黒斑山東部の破壊によって生じた「泥流」および流下した状態を示す図（荒牧重雄 浅間山の地質による）

参考文献

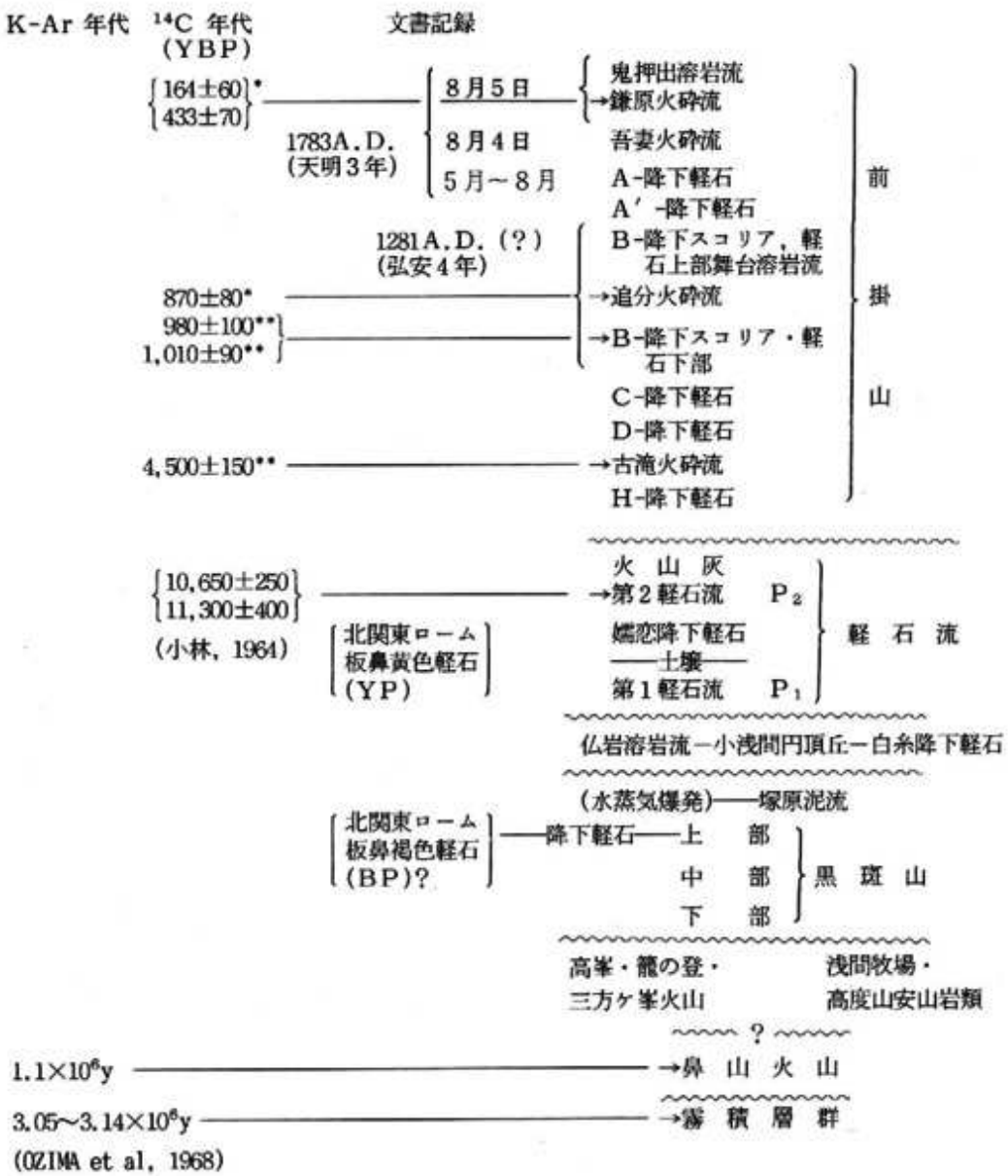
白倉盛男　1971　浅間山と火山博物館　小諸市立火山博物館

荒牧重雄　1968　浅間火山の地質　地学団体研究会

第２節　遺跡の歴史的環境

荒田・上金井遺跡を包括する中金井遺跡群内では、昭和45年度に実施された皎月古墳以外調査例がなく、皎月古墳自体の正式報告も未刊であるため、ここでは佐久市遺跡詳細分布調査をもとに本遺跡とその周辺遺跡について時代別に概観してみたい。

まず、縄文時代では唄坂(7)・芋の原(8)・上長坂(9)・上の原(10)・芝宮(16)といった遺跡・遺跡群が存在するものの、時期等については一切不明である。ただ、湯川左岸に位置する芋の原・上長坂・上の原の３遺跡は隣接しており、ある程度継続した集落址の存在する可能性が強いものと思われる。



第1表　浅間火山を中心とした編年　（荒牧重雄「浅間山の地質」に加除）

弥生時代の遺跡は長土呂(1)・唄坂(7)・芋の原(8)・上長坂(9)・上の原(10)・潰石(13)・栗毛坂(15)・芝宮(16)といった遺跡・遺跡群があげられ、縄文時代に比べ遺跡数は急増しており、本遺跡群とその周辺地域は弥生時代に急速な開発が行なわれたようである。

古墳時代～平安時代の遺跡は弥生時代と変化は認められず、継続的に集落が営まれたようであるが、現在のところその詳細は不明である。ただ、古墳時代後期には湯川左岸の横根地区に平・矢口・横根といった古墳群が出現し、また本遺跡群中には皎月古墳(4)が、また隣接する跡坂遺跡群中には島原古墳(3)・からむし古墳(2)が認められる事から、古墳時代後期が当該地域のひとつの

No.	佐分No.	遺跡名	所在地	立地	時代 縄	弥	古	奈	平	中	備考
1	9	長土呂遺跡群	長土呂字長土呂隠し 他	台地		○	○	○	○	○	県 No.80
2	15	からむし古墳	横根字東海老 873	〃			○				県 No.76
3	14	島原古墳	小田井字下金井705	〃			○				県 No.77
4	13	皎月古墳	小田井字皎月836-1	〃			○				県 No.78
5	12	中金井遺跡群	小田井字西浦 他	〃		○	○	○	○		
6	540	金井城跡	小田井字南金井	〃						○	文献 69
7	21	唄坂遺跡	小田井字唄坂	段丘	○	○	○	○	○		
8	19	芋の原遺跡群	横根字芋の原 他	台地	○	○	○	○	○		
9	20	上長坂遺跡群	横根字上長坂・下長坂	〃	○	○	○	○	○		
10	18	上の原遺跡群	横根字上の原 他	〃	○	○	○	○	○		
11	539	延寿城跡	横根字延寿城	〃						○	文献 69
12	17	延寿城遺跡群	横根字延寿城・石	〃					○		
13	53	潰石遺跡	上平尾字潰石・中川原他	〃		○	○	○	○		県 No.58
14	54	潰石古墳	上平尾字潰石559-6	〃			○				県 No.57
15	10	栗毛坂遺跡群	小田井字笹沢 他	〃		○	○	○	○		県 No.75
16	8	芝宮遺跡群	長土呂北上中原 他	〃	○	○	○	○	○		県 No.81

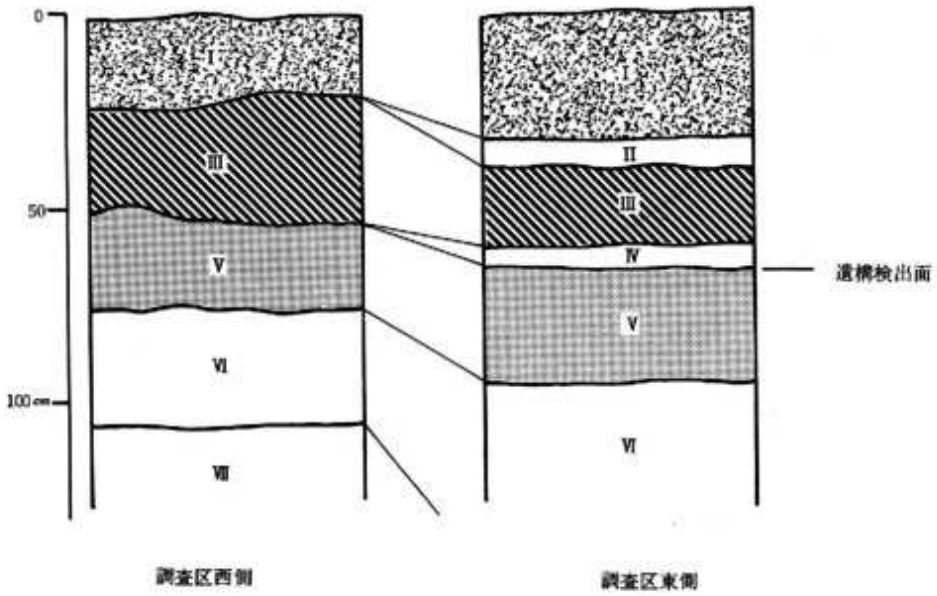
第4図　周辺遺跡分布図・第2表　周辺遺跡一覧表

変換期であったようである。

中世には、本遺跡群中の金井城跡(6)・湯川左岸の延寿城跡(12)をはじめ、小田井城跡・白岩城跡等の城郭が数多く築造されるが、年代・縄張り等の詳細については不明な点が多い。

以上、本遺跡とその周辺地域について、時代別に遺跡を概観した。しかし、調査例が非常に限定されており、その詳細については今後の課題とすべき点が多い。

第Ⅲ章　基本層序



第Ⅰ層—黒褐色土（10ＹＲ3/2）表土。

第Ⅱ層—赤褐色土（10ＹＲ4/4）鉄分の沈殿層。

第Ⅲ層—黒褐色土（５ＹＲ3/1）

第Ⅳ層—黄褐色土（75ＹＲ5/8）第Ⅲ層と第Ⅴ層の混合。

第Ⅴ層—黄橙色土（10ＹＲ7/8）ローム層。軽石を多含する。

第Ⅵ層—赤褐色土（５ＹＲ4/8）ローム層。

第Ⅶ層—明褐色土（75Ｙ4/8）ローム層。

第５図　基本層序模式図

荒田・上金井遺跡は、湯川右岸の標高 750～780 m を測る台地上に存在する。調査区は南に向って非常に緩い傾斜を示す。

遺跡の基本的な層序は第３図に示したとおりで、第Ⅰ層が20～30cm、第Ⅲ層が20～35cmの堆積で第Ⅴ層下はローム層となるが、調査区の東側と西側では若干の相異を見せる。調査区の西側は前述した土層堆積通りであるが、東側ではⅠ層とⅢ層の間に鉄分の沈殿層（第Ⅱ層）を挟み、さらに第Ⅲ層と第Ⅴ層の間に黄褐色土層（第Ⅳ層）を挟んでいる。このような相異はＭ２～Ｍ３にかけての範囲で生じているが、その成因は第Ⅱ層は耕作、第Ⅳ層は自然流によるものと考えられる。

遺構の検出は第Ⅲ層上面で可能であるが、不明瞭な部分が多いため、調査時には第Ⅴ層上面で行った。

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　検出遺構・遺物の概要

今回の調査で検出された遺構・遺物の概要は下記の通りである。

遺構	溝状遺構	３条	中世以降
	土　坑	１基	時代不明
遺物	縄文時代	深鉢	
	中世以降	土師質土器小皿	鉄釉陶器

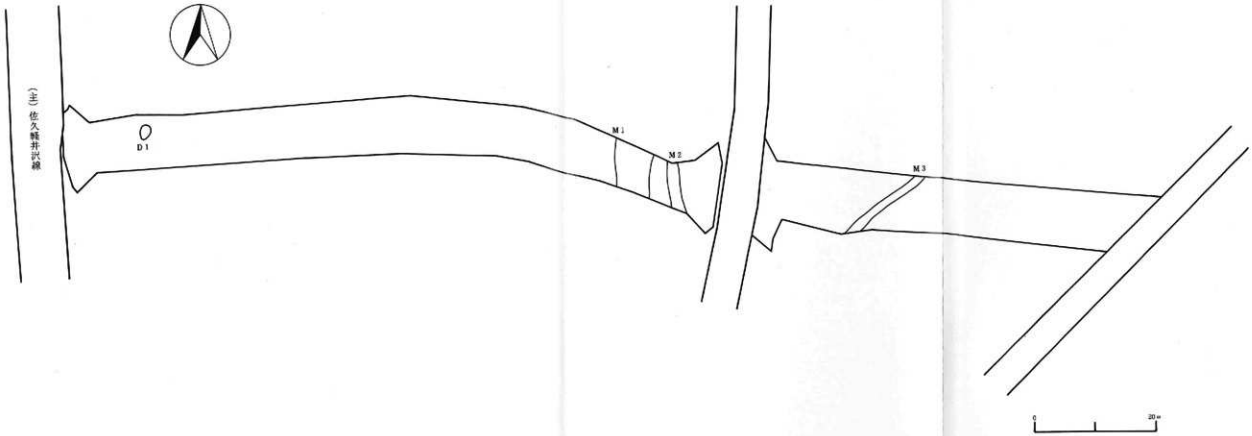
第２節　溝状遺構

１）第１号溝状遺構

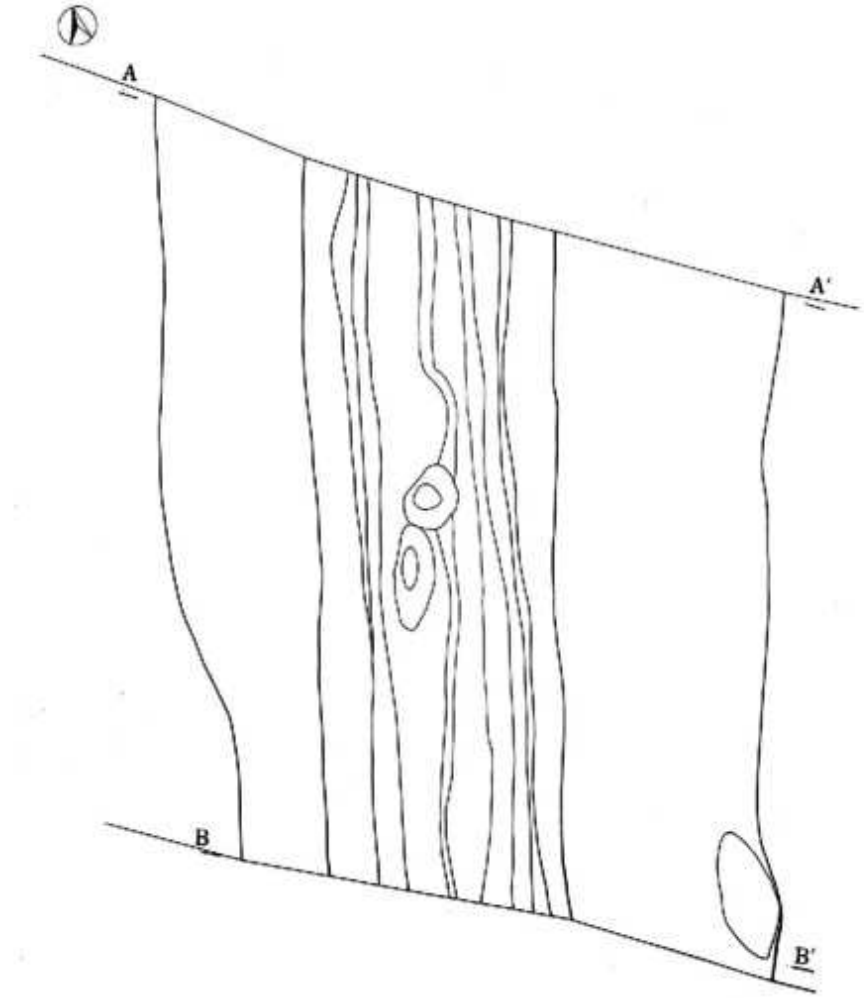
遺構（第５図、図版二）

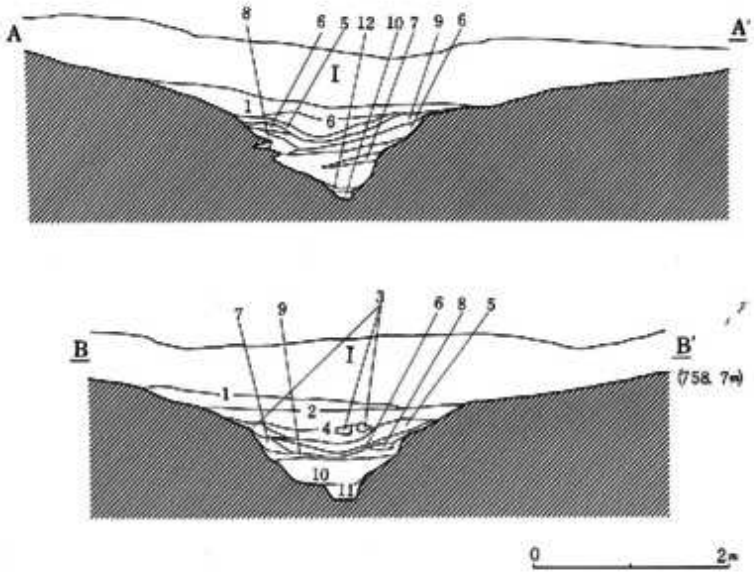
本遺構は調査区中央やや東側で検出された。調査範囲内ではほぼ南北方向に走る。幅63～55 m 検出面から約1.1m の深度を測り、北から南に向って緩やかに深度を増す。断面形は緩傾斜する幅50cmほどの「犬走り」状のテラス部を両側にもつ逆台形を呈する。

覆土には、底面以外にも数ケ所において砂層が認められることから、埋没過程において断続的



第6図　荒田・上金井遺跡遺構全体図





1 ―暗褐色土（10YR3/4）ローム粒子を含む。
2 ―黒褐色土（10YR3/2）φ0.5―1mの縁石，ローム粒子を含む。
3 ―褐色土（10YR4/4）ローム粒多含。
4 ―黒褐色土（10YR3/2）ローム粒を僅かに含む。
5 ―黒褐色土（10YR2/3）ローム粒含む。やや締り有り。
6 ―にぶい黄褐色土（10YR4/3）ローム粒多含。
7 ―褐色土（10YR4/6）壁崩落層。
8 ―灰褐色土（10YR5/2）砂層。
9 ―黒褐色土（10YR2/3）
10 ―8層と同一。
11 ―灰褐色土（10YR5/2）砂粒主体。
12 ―にぶい黄褐色土（10YR5/4）ローム粒を主体とする砂層。

第7図　第1号溝状遺構実測図

に水流があった事が推測される。

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期は不明である。

2）第2号溝状遺構

遺構（第6図、図版三）

本遺構は第1号溝状遺構から東に2.5～4m離れ、ほぼ併走する。幅14～18m、検出面からの深度は北端部分で36cm・南端部分で75cmを測り北から南に向って深度を増すが、南半分は流水による底面の浸食が認められるため、本来は検出面から45cm前後の深度を有していたものと推測される。断面形は逆台形を呈する。

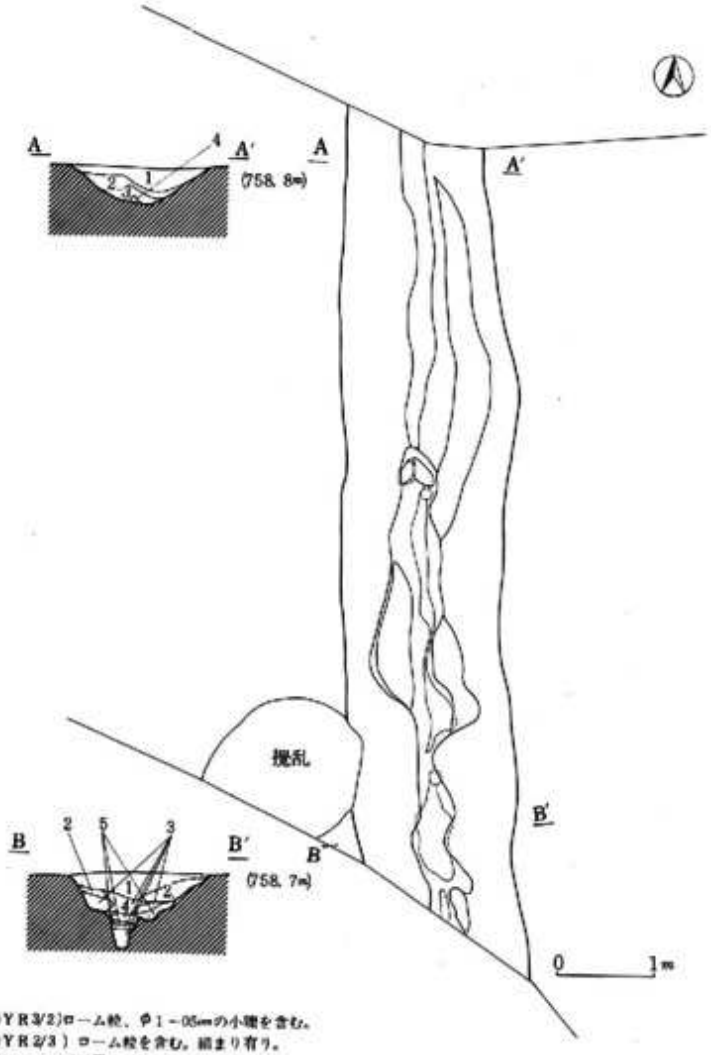
覆土には、第1号溝状遺構同様に、底面以外にも砂の推積層が認められる事から、埋没過程において断続的な水流があった事が推測される。

遺物

覆土中より図示不可能な土師質土器小皿の底部片が1点出土している。

底部糸切未調整で、比較的厚めの器壁を有し、胎土には白色粒子・雲母粒を多含する。焼成は良好で、内外面共に橙色（75YR6/6）の色調を呈する。

以上のように、本遺構からは1片の土器が出土しているのみであり、その所産期を断定する事はできない。



1 ―黒褐色土（10YR3/2）ローム粒、φ1～05mmの小礫を含む。
2 ―黒褐色土（10YR2/3）ローム粒を含む。締まり有り。
3 ―灰黄褐色土（10YR5/2）砂質。φ1～2mmの軽石を含む。
4 ―黒褐色土（10YR2/2）ローム粒、φ1～2mmの軽石を僅かに含む。
5 ―黒色土（10YR3/3）弱い粘性をもつ。

第8図　第2号溝状遺構実測図

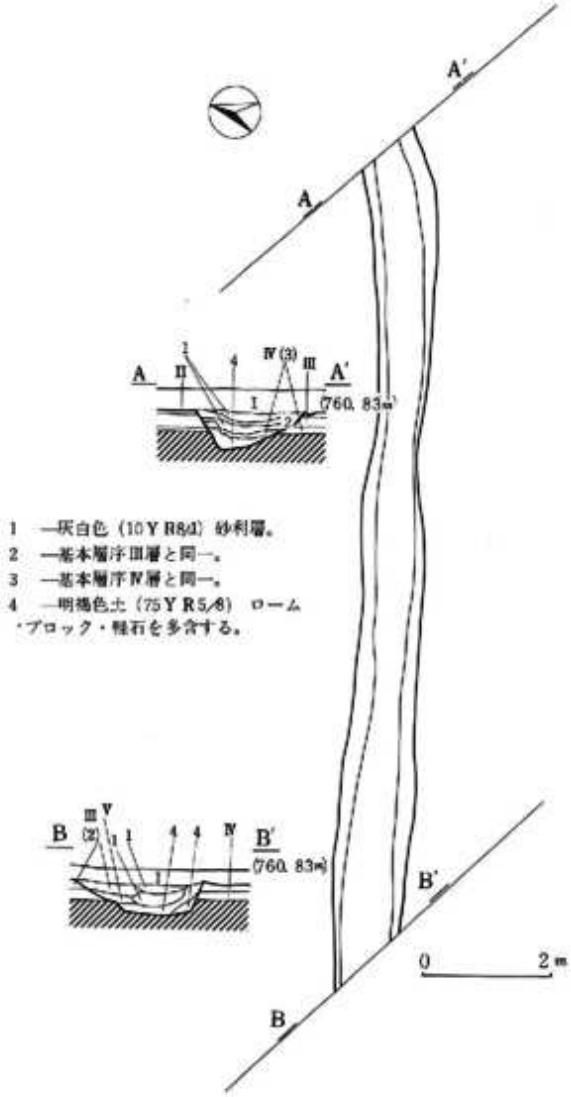
3）第3号溝状遺構

遺構（第7図、図版四）

本遺構は調査区東端より西方向に40ｍの位置で検出された。ＮＥ－ＳＷ方向に走る。幅約16～２ｍを測るが、検出面では１ｍ前後となる。検出面からの深度は20～30cmであるが、Ｉ層下からは50～60cmの深度を測る。断面形は逆台形を呈する。

覆土中には砂層が数ケ所で確認でき、埋没過程において断続的な水流があったことが推測される。

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期は不明である。



第9図　第3号溝状遺構実測図

第3節　土坑

1）第1号土坑

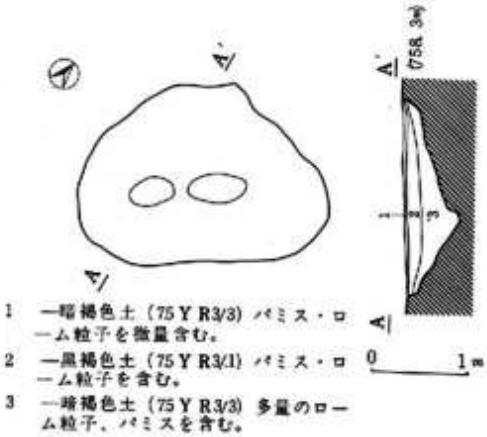
遺構（第8図、図版五）

本遺構は調査区西端より13ｍ東方で検出された。長辺をＮＥ－ＳＷにとる不整な楕円形の平面形状を呈し、長辺2.55ｍ×短辺18ｍを測る。検出面からの深度は最深部で57cmを測る。

底面には45×28cm・60×30cmの平面楕円形、深度13cmのＰｉｔ状の落ち込みを２ケ所有する。立ち上がりは、検出面から10～20cmほどは判然と識別できるが、底面はさらに緩傾斜して前記したＰｉｔ状の落ち込みに達している。

覆土は3層から成るものの、非常に近似した色調を呈し、混入物も量の寡多は認められるものの、混入物そのものは同一である事から、短期間で埋没した可能性が強いように思われる。

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期・性格は不明である。



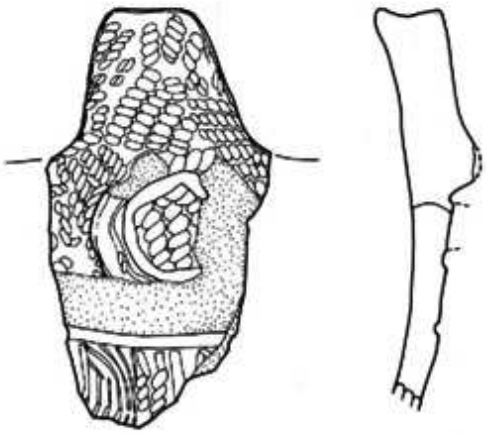
第10図　第1号土坑実測図

第4節　遺構外出土遺物

縄文時代中期後半の深鉢口縁部片（9－1）が1点と、瀬戸・美濃系と思われる図示不可能な鉄釉陶器碗片が1点出土している。

9－1は突起状の波状口縁を有し、波頂下に貼付隆帯による渦巻文モチーフを連結させる横位の隆帯により口縁部文様帯を区画する。おそらくは口縁部と胴部の2帯の横位構成の文様帯を有するものと思われる。口縁部には隆帯貼付後縄文を施し、胴部は縦方向の条線を地文に、これを縦位に区画するであろう幅狭な縄文帯が認められるが、文様帯の単位数は不明である。胎土には雲母・長石状の鉱物、白色・赤色の粒子を多含しており、にぶい橙色（75YR6/4）の色調を呈する。

焼成は比較的良好であり、器面の状態もさしたる劣化は認められない。本資料は縄文中期後半加曾利E Ⅲ式期頃の所産と思われるが、佐久平の該期の資料はあまりにも乏しく現時点では類例は認められないため、その系統等については今後の資料蓄積を待ちたい。



第11図　遺構外出土縄文土器実測図

第Ⅴ章　調査のまとめ

荒田、上金井遺跡で検出された溝状遺構Ｍ１は、その後実施された金井城跡の調査によって金井城を区画する堀の中で、最も外側に配置されたM36と接続する事がほぼ確実となった。この事により、Ｍ１以東は金井城の城域に含まれる事が判明した。（付図参照）

金井城跡については、報文の刊行準備が進められておりその内容に立ち入ることは差し控えたいが、以下いくつかの点について簡単にふれておきたい。

１－Ｍ１は金井城跡での調査区部分に比べ深度が浅くなっており、北から南に向って順次深度を増している。

２－Ｍ２はＭ１とほぼ併走しており、かつ覆土の堆積状態・内容も近似している事から金井城に伴う施設と考えられる。

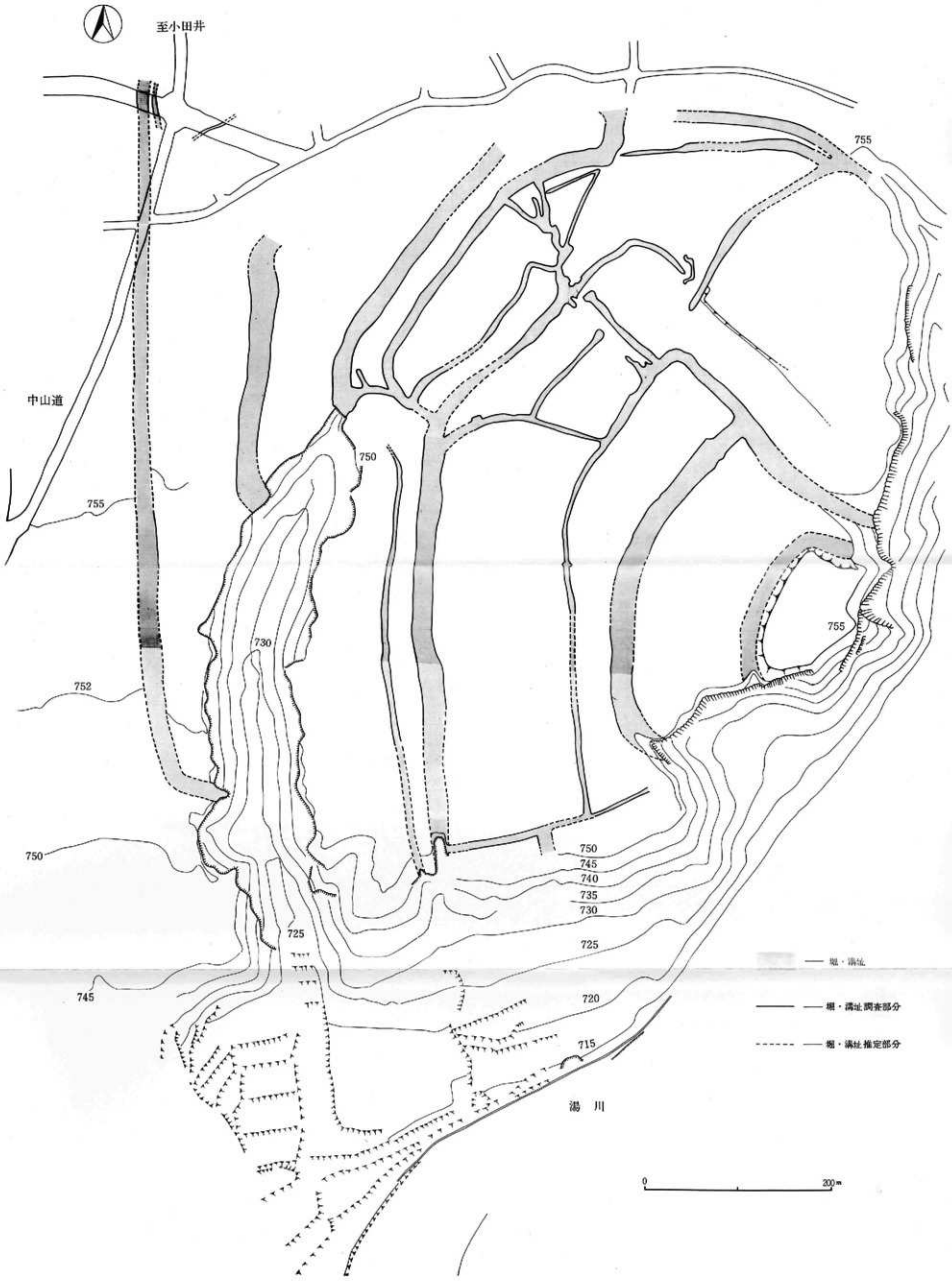
３－Ｍ３については、Ｍ１・Ｍ２と覆土内容・進行方向に相異が認められる事から、金井城跡に伴うか否かは断定できかねる。

４－Ｍ１（M36）が現時点では金井城を区画する最も外側の堀であるが、さらに外側に堀が存在する可能性もある。

最後に荒田・上金井遺跡で検出されたＭ１が、金井城跡のM36と同一の遺構である事が判明したため、Ｍ１以東を金井城跡に遺跡名を改め、Ｍ１は金井城跡M36と遺構名称を改めておきたい。

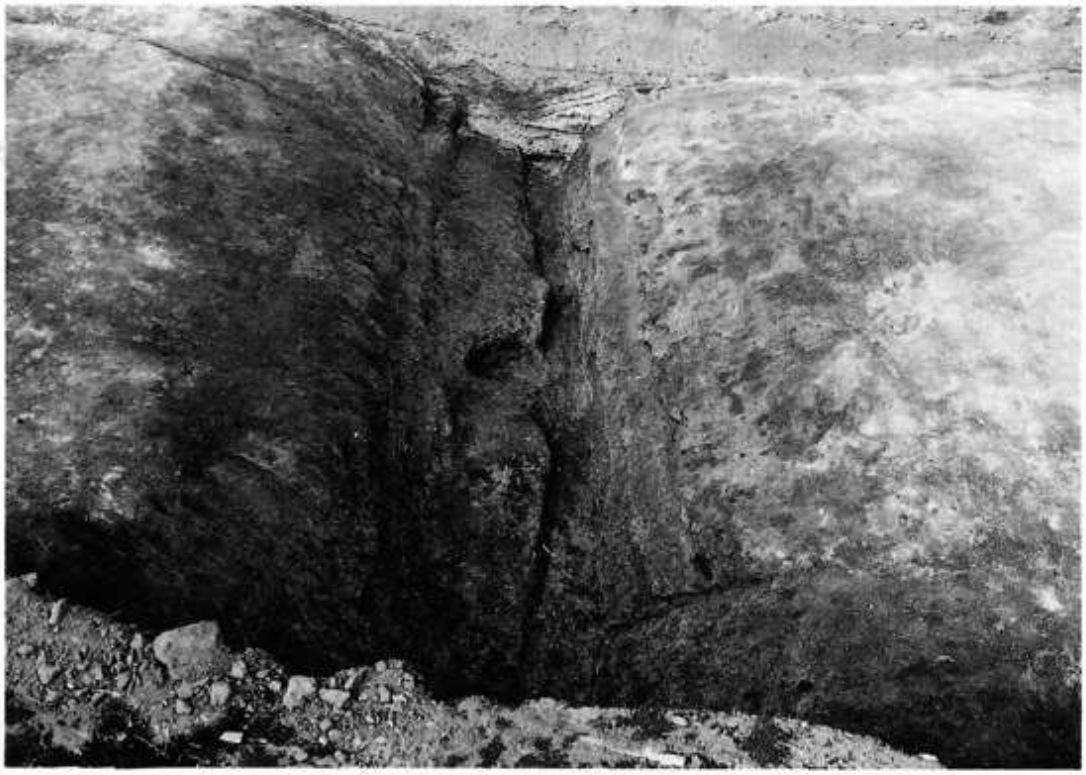
引用、参考文献

佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター　1986　『宮の上』
小諸市教育委員会　1983　『曽根城遺跡』
東部町教育委員会　1987　『古屋敷・不動坂遺跡群Ⅱ』



付 図 金井城跡堀・溝址配置図

荒田・上金井遺跡全景



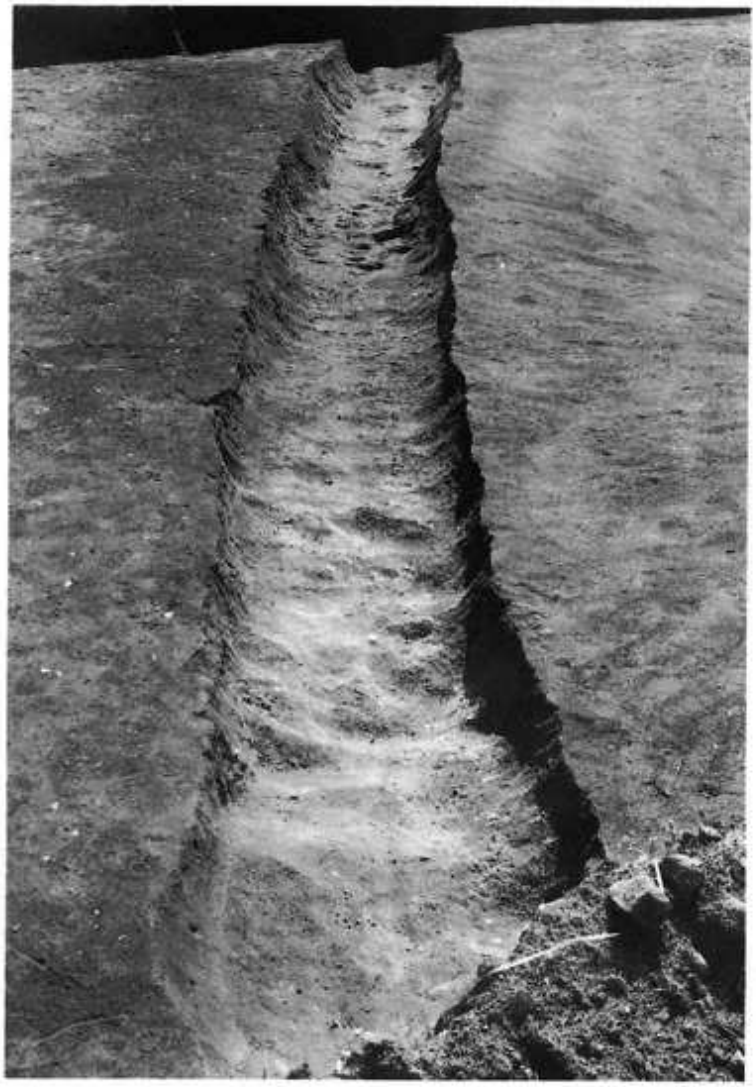
1　第1号溝状遺構（南方より）

2　第1号溝状遺構セクション（A－A′）

3　第1号溝状遺構セクション（B－B′）

1　第２号溝状遺構（北方より）

2　第１・２号溝状遺構　（北方より）



1　第３号溝状遺構（北方より）

2　第３号溝状遺構セクション（A－A′）

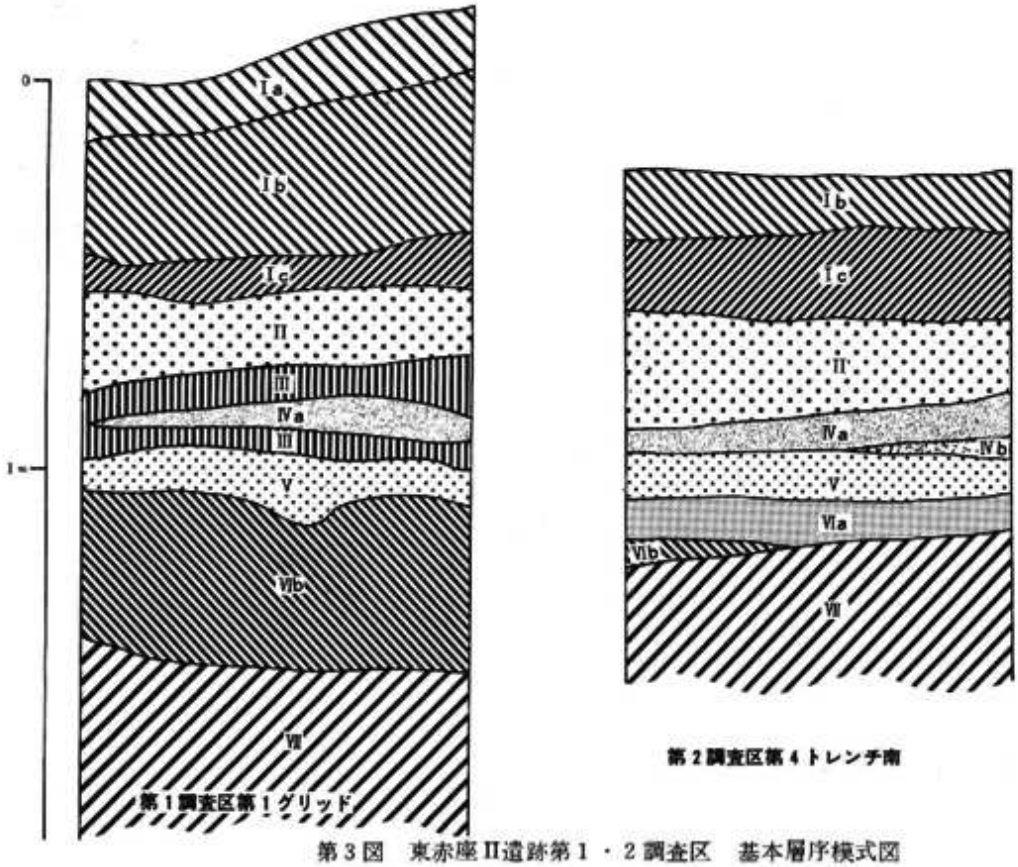
1　第1号土坑（南方より）

2　遺構外出土縄文土器（第11図）

第III章　基本層序及び概要

第1節　基本層序

東赤座II遺跡は、湯川右岸、田切地形台上の西赤座遺跡に東接、栗毛坂遺跡群に西接して所在し、標高は 731 m ～ 734 m、湯川河床からの比高差はおよそ35 m を測り、南に向かって傾斜する。この傾斜のためか第1調査区と第2調査区では基本土層が若干異るため、ここでは3本の基本土層を提示しておく。



第3図　東赤座II遺跡第1・2調査区　基本層序模式図

第Ia層　10YR7／1　灰白色土層　粘性ややあり、粒子細かく、茶褐色土粒子混入する。

第Ib層　10YR7／1　灰白色土層　Ia 層に類似するが、茶褐色土粒子混入が少ない。

第2編 東赤座II遺跡

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第1節　発掘調査に至る動機

東赤座II遺跡は、湯川の右岸にあり、田切地形の台地東端部に位置し、標高は、730 ～ 736 m を測る。栗毛坂遺跡群の調査は、昭和60年度に芝間遺跡が佐久埋蔵文化財調査センターにより実施されており、古墳時代後期の住居址1棟、平安時代の住居址3棟、平安時代の特殊遺構1基、中世の竪穴状遺構1基、土坑5基、溝状遺構6基、ピット群などが検出されている。昭和61年度には、佐久市教育委員会で実施した赤座頭遺跡があり、中世と思われる溝1基、時期不明の土坑3基が検出されている。更に昭和61・62年度にわたり、長野県埋蔵文化財センターが実施した栗毛坂遺跡群及び西赤座遺跡の発掘調査により、平安時代を中心とした住居址約75棟、掘立柱建物址約60棟、井戸・畑の跡等が検出されている。

第1図　栗毛坂遺跡群東赤座II遺跡の位置
（1：50,000　国土地理院地形図による）

今回、佐久市土木課による市道赤座東線道路改良事業・市道赤座西線道路改良事業に伴い、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、緊急に記録保存する必要性が生じた。そこで、佐久市教育委員会が佐久市土木課より委託を受け、佐久市教育委員会からの委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。

第2節　調査日誌

11月10日(火)

佐久市土木課・佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センターの3者で現地協議を行う。

11月27日(金)

西線内及び東線南寄りに重機によりトレンチを入れ、東線部を第1地区、西線部を第2地区とする。

11月28日(土)～30日(月)

重機により、第1地区の表土削平作業を行う。

12月1日(火)～3日(木)

第1地区、遺構検出のための精査作業を行い、当遺跡の基準標高点を設置し、BM1 732m BM2 7328mとする。

12月4日(金)

実測作業、全景写真の撮影を行い、第1地区の調査を終了する。一方、第2地区において遺構検出のための精査作業を行い、土坑1基を検出する。

12月8日(火)～9日(水)

第1号土坑の掘り下げ作業、実測作業、全景写真撮影を行い、第2地区の調査を終了する。

12月12日(土)～15日(火)

表土運搬作業とテント・機材の撤収を行う。

12月16日(水)～昭和63年3月23日（月）

室内にて、報告書作成作業を行い、すべての調査を完了する。

第II章　遺跡の環境

第1節　栗毛坂遺跡群付近の自然環境（地形と地質）

千曲川支流中、最大河川である湯川は、浅間火山南東斜面標高1200m附近の千ケ滝を源とし、南軽井沢から湿地帯の水を集めて西流してくる泥川を軽井沢町油井部落で合流して、南西方向に流路を変え、小支流を合わせ乍ら御代田町を流下し、佐久市に流入している。佐久市内に入ってからは、横根付近で谷幅を増し、両岸にわずかな河岸段丘の発達を見ることができる。この付近でも、地盤の隆起運動の結果と見られる河床の下方浸蝕が激しく、流路は蛇行し、河流の側面攻撃で高い断崖を作り、対岸では第一段丘を形成している。

濱石地区附近の湯川右岸に広がる栗毛坂遺跡群は、湯川との比高差約34m、標高約733～737mを測る。

気候を観ると、佐久地方は日本列島のほぼ中央に位置し、夏季は太平洋から吹いて来る湿った季節風が関東山地にぶつかり、多くの雨を降らせ、佐久地方に吹き込んで来る時にはすでに乾燥した空気となっている。また、冬季は逆に日本海を越えて吹き込む季節風も、日本海側に多くの雪を降らせ、佐久に吹き込む時にはやはり乾燥した空気となっている。このため、乾燥性内陸気候となり、一日の気温差、一年の気温差が著しく、降水量も年間平均964mmと北海道と共に雨の少ない地帯となっている。

しかし、佐久市岩村田・御代田町の佐久平北端平坦面は、湯川のほかにも浅間山裾野1000m付近からの自然湧水濁川・湧玉川・久保沢川、用水では御影新田用水・千ケ滝用水・千ケ滝用水から分かれた岩村田用水等がある。これらは火山地方からの流水であるため、稲の成育に欠くことのできない成分の一つである珪酸含有量が高い。従って、軽井沢に次ぐ高原盆地であり乍ら、昼夜の温度差、水質に恵まれた水利の安定、一毛作などの好条件下において、稲作反収は全国でも高水表にある。

地質学的に観ると、佐久平北半旧北佐久分千曲川右岸では、全て浅間火山の噴出推積物で覆われており、他の地層を観ることはできない。

現在も噴火活動を続けている浅間山は、幾度となく大小の噴出を繰り返しているが、塚原泥流の流れ山形成後、特に多量の噴出をみた第1軽石流により、東は軽井沢町千ケ滝、西は小諸壊古

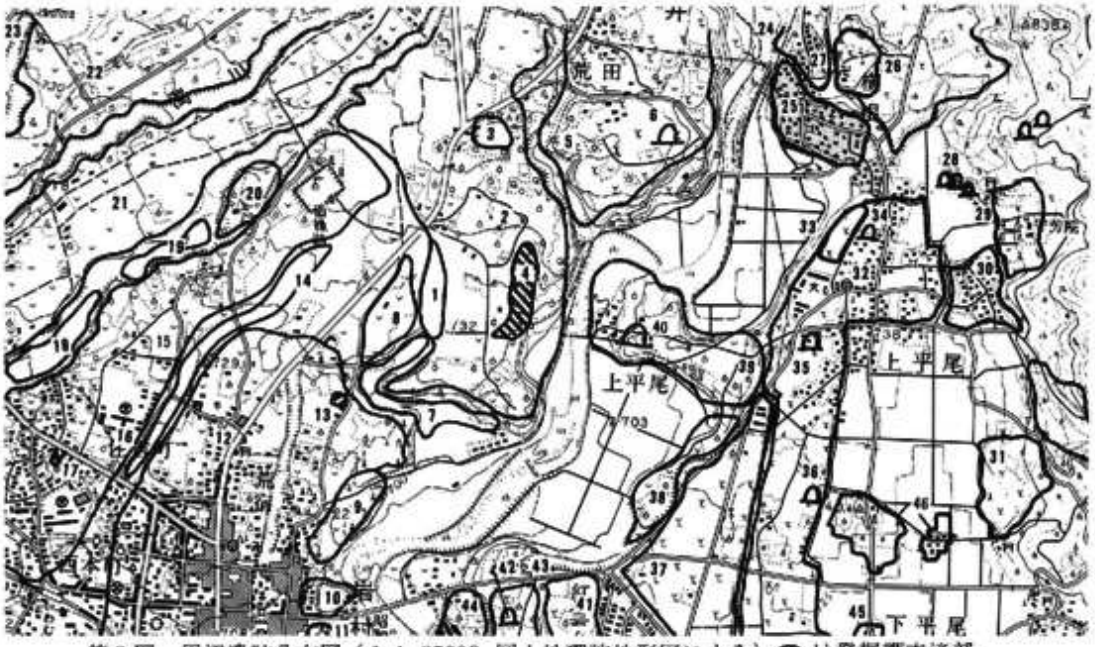
園付近、南は佐久市中込原まで浮石火山灰層が推積しており、浅間山の基盤層のようになっている。これらの中で、湯川沿岸に水中沈澱し、全面的に分布する水中堆積層は湯川層と命名されている。湯川層は堅くしまっていない若い堆積であるため、主に水蝕による「田切地形」が至る所に作られており、栗毛坂遺跡群は、この田切の削り残された湯川層の上にのっている。

引用参考文献　白倉庄男　1986　『芝間遺跡』　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
樋口和雄　1988　『十二遺跡』　御代田町教育委員会
岡部　静　1978　『平根村誌』　佐久市立平根小学校

第2節　遺跡の歴史的環境

東赤座II遺跡は湯川右岸に位置し、湯川からの直線距離は約500 mの田切地形台上で栗毛坂遺跡群の最西限、西赤座遺跡に西接して所在する。この湯川の両岸は佐久市内でも極立つ遺跡密集地であり、特に右岸は田切地形による南方に張り出す舌状台地を利用した跡地遺跡群（5）・栗毛坂遺跡群（2）・批把坂遺跡群（15）・長土呂遺跡群（21）・周防畑遺跡群（23）等の大規模な遺跡群が並んでいる。それに比して、左岸の大規模な遺跡群は湯川河岸段丘を利用した西大久保遺跡群（37）・東大久保遺跡群（32）を挙げるにとどまり、大方は小田切を利用している。

これらを時期的に概観すると、弥生時代から平安時代まで断続的に続く遺跡が多いが、田切地形を巧みに利用した石並城(9)・王城(10)・黒岩城(11)・曾根新城跡（20）・延寿城跡（27）・白岩城（33）等の中世城跡が多いのも特徴である。古墳については、湯川左岸の段々と高まる河岸段丘から平尾富士裾にかけて矢口古墳群(28)・宿古墳(34)・宮の西古墳(36)・潰石古墳(40)・棧敷古墳(42)と多く分布するが、左岸においてはからむし古墳(6)のみと稀少で対照的である。



第2図　周辺遺跡分布図（1：25000 国土地理院地形図による）▬は発掘調査済部

このように、東赤座Ⅱ遺跡周辺、特に湯川右岸においては大遺跡集中地帯となっており、更に東赤座Ⅱ遺跡は栗毛坂遺跡群に含まれているとあって、弥生時代から中世にわたる遺構・遺物の存在が予想されていた。

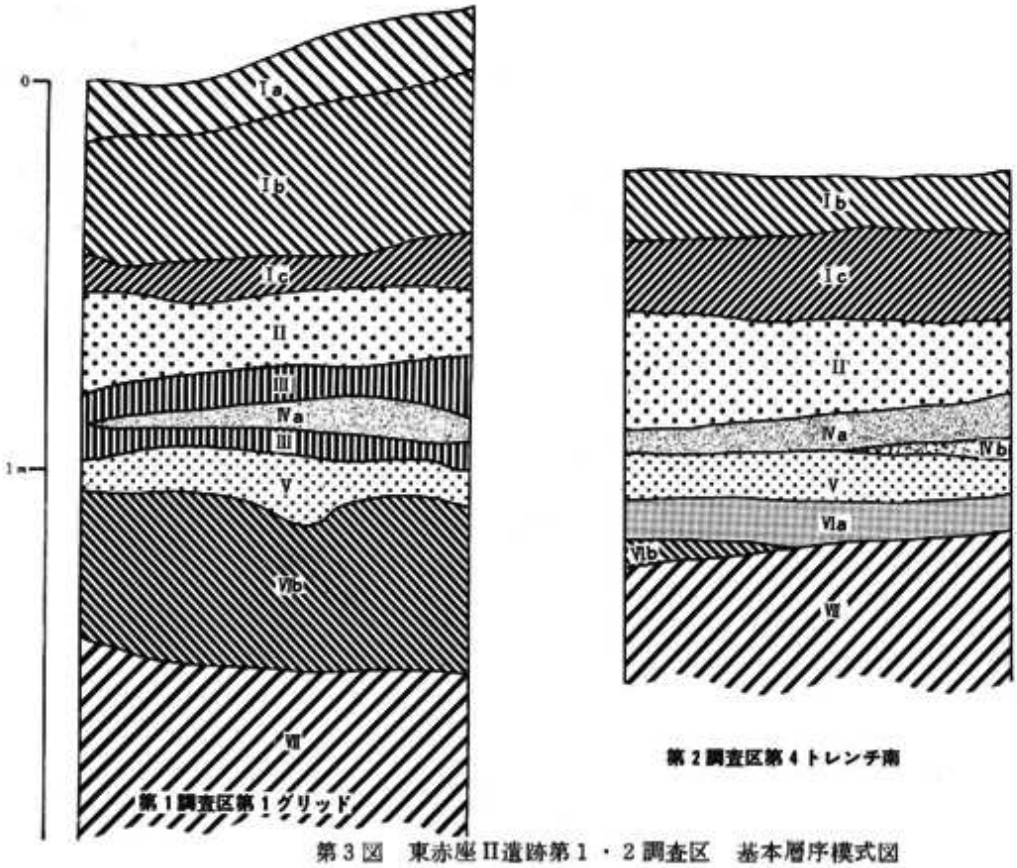
第1表　周辺遺跡一覧表

No.	佐分No.	遺跡名	所在地	立地	時代 縄	弥	古	奈	平	中	備考
1		東赤座	岩村田字東赤座・西赤座	台地							本調査
2	10	栗毛坂遺跡群	小田井字笠沢前藤部・岩村田字東赤座 他	〃		○	○	○	○		
3	16	鵜縄澤端一里塚	岩村田字鵜縄澤端	〃							近世
4		芝間	岩村田字芝間	〃			○		○	○	昭和60年度発掘調査
5	11	跡地遺跡群	小田井字竜月 他	〃		○	○	○	○		
6	15	からむし古墳	横根字東海老	〃			○				
7	44	上岩子遺跡	岩村田字上岩子 他	低地					○		
8	43	西赤座遺跡	岩村田字西赤座 他	台地		○	○	○	○		
9	51-2	石並城	岩村田字石並	〃		○	○	○	○		
10	51-1	王城	岩村田字古城	〃		○	○	○	○	○	昭和54年度公園化に伴い一部調査
11	51-3	黒岩城	岩村田字古城	〃		○	○	○	○	○	昭和55・59年度発掘調査
12	52	岩村田遺跡群	岩村田字六供後 他	〃		○	○	○	○	○	
13	52-1	六供後遺跡	岩村田字六供後	〃						○	昭和55年度発掘調査
14	42	中久保田遺跡	岩村田字中久保田 他	〃		○	○	○	○	○	
15	41	批把坂遺跡群	岩村田字批把坂 他	〃		○	○	○	○		
16	41-1	批把坂遺跡	岩村田字批把坂	〃				○	○		昭和55年度発掘調査
17		上直路	岩村田字上直路	〃		○					昭和60年度発掘調査
18	38	下蟹沢遺跡	長土呂字下蟹沢 他	低地		○	○	○	○		
19	45	新城遺跡	岩村田字新城	〃		○	○	○	○		
20	541	曽根新城跡	岩村田字下穴虫	台地						○	
21	9	長土呂遺跡群	長土呂字長土呂諏し 他	〃		○	○	○	○	○	
22	8	芝宮遺跡群	長土呂字上中原 他	〃	○	○	○	○	○		
23	7	周防畑遺跡群	長土呂字周防畑 他	〃	○	○	○	○	○		
24	19	芋の原遺跡群	横根字芋の原 他	〃	○	○	○	○	○		
25	17	延寿城遺跡群	横根字延寿城・石	〃					○		
26	18	上の原遺跡群	横根字上の原 他	〃	○	○	○	○	○		
27	539	延寿城跡	横根字延寿城	〃						○	
28	23	矢口古墳群	横根字矢口	山腹			○				
29	58	矢澤遺跡	上平尾字矢澤	斜面					○		
30	57	十二前遺跡	上平尾字十二前	台地					○		
31	60	北山寺遺跡	下平尾字北山寺	斜面					○		
32	56	東大久保遺跡群	上平尾字東大久保 他	台地	○	○	○	○	○		
33	67	白岩城	上平尾字古城跡	〃						○	
34	72	宿古墳	上平尾字宿	〃			○				
35	71	塚畑古墳	上平尾字塚畑	〃			○				
36	73	宮の西古墳	下平尾字宮の西	〃			○				
37	47	西大久保遺跡群	上平尾字西大久保 他	〃	○	○	○	○	○		
38	46	膜巻遺跡	下平尾字膜巻	段丘		○	○	○	○		
39	53	潰石遺跡	上平尾字潰石・中川原 他	〃		○	○	○	○		
40	54	潰石古墳	上平尾字潰石559-6	〃				○			
41	48	棧敷遺跡	安原字棧敷	台地					○		
42	55	棧敷古墳	安原字棧敷1520	〃			○				
43	49	上小平遺跡	44	50	下小平遺跡	45	127	戸屋敷遺跡群	46	59	宮前遺跡

第III章　基本層序及び概要

第1節　基本層序

東赤座II遺跡は、湯川右岸、田切地形台上の西赤座遺跡に東接、栗毛坂遺跡群に西接して所在し、標高は 731 m～ 734 m、湯川河床からの比高差はおよそ35 m を測り、南に向かって傾斜する。この傾斜のためか第1調査区と第2調査区では基本土層が若干異るため、ここでは3本の基本土層を提示しておく。



第3図　東赤座II遺跡第1・2調査区　基本層序模式図

第Ia層　10YR7／1　灰白色土層　粘性ややあり、粒子細かく、茶褐色土粒子混入する。

第Ib層　10YR7／1　灰白色土層　Ia 層に類似するが、茶褐色土粒子混入が少ない。

第Ⅰc 層　5ＹＲ5／8　明赤褐色土層　粘性ややあり、粒子粗く、小礫・灰白色粒子を含む。

第Ⅱ層　10ＹＲ5／2　灰黄褐色土層　粘性ややあり、粒子粗く、砂粒・茶褐色粒子・小礫を含む。

第Ⅲ層　10ＹＲ6／2　にぶい黄橙褐色土層　粘性なし、砂粒主体の層。

第Ⅳa 層　10ＹＲ5／1　褐灰色土層　粘性ややあり、小礫・茶褐色土粒子を少量含む。

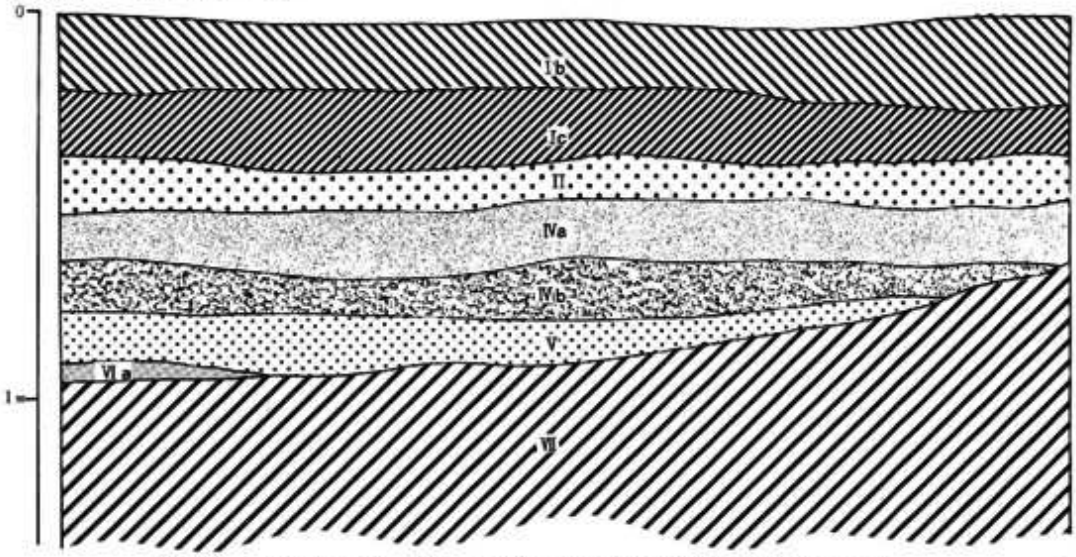
第Ⅳb 層　10ＹＲ5／6　黄褐色土層　粘性ややあり、φ05cm大の小石粒子を僅かに含み、粒子は密である。

第Ⅴ　層　10ＹＲ4／2　灰黄褐色土層　粘性あり、茶褐色土粒子・黄色粒子を少量含む。

第Ⅵa 層　10ＹＲ2／2　黒褐色土層　粘性あり、粒子細かく、緻密であり、細かい砂粒子を極く少量混入する。

第Ⅵb 層　10ＹＲ17／1　黒色土層　粘性あり、粒子細かく、緻密である。

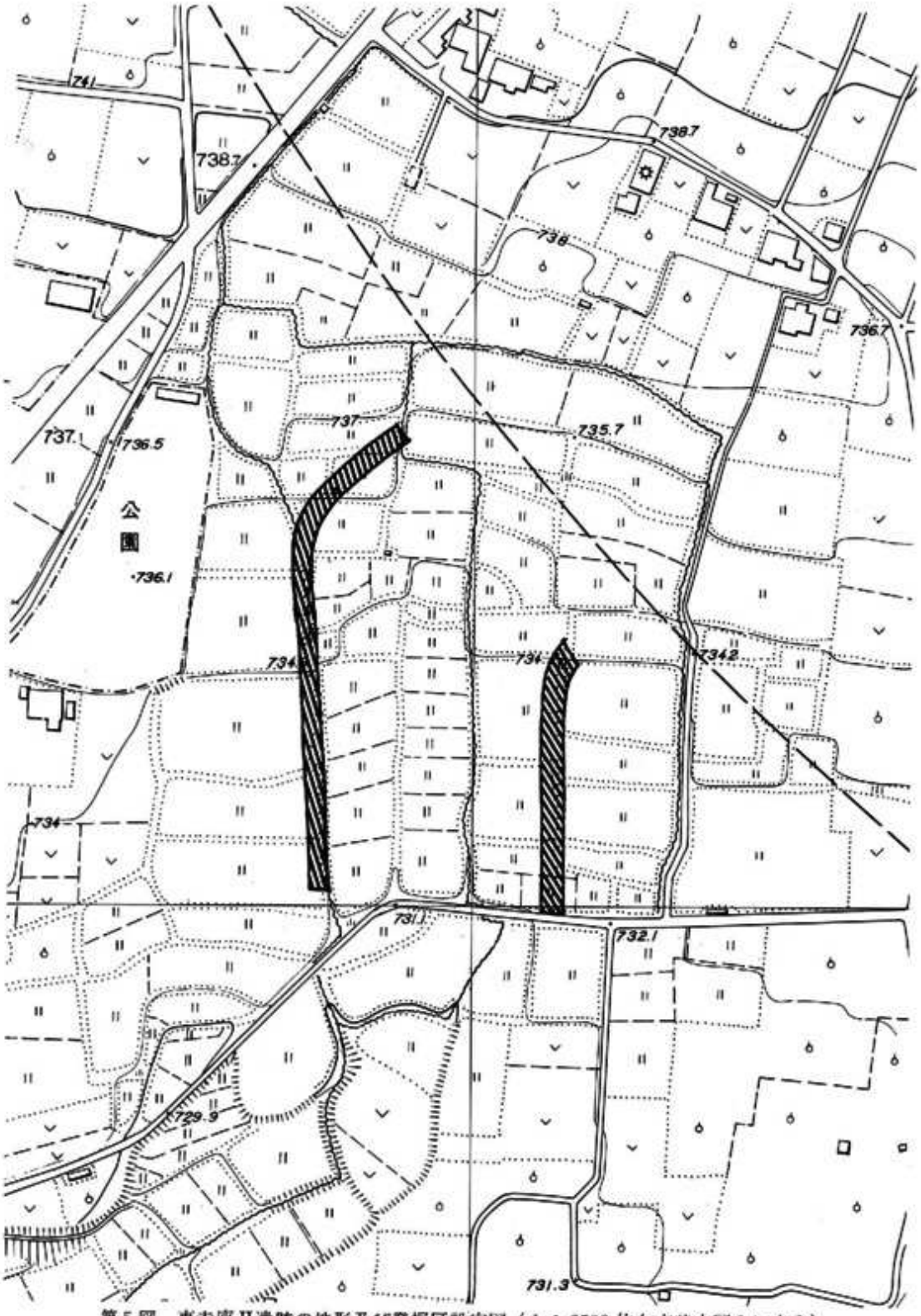
第Ⅶ層　黄褐色ローム。



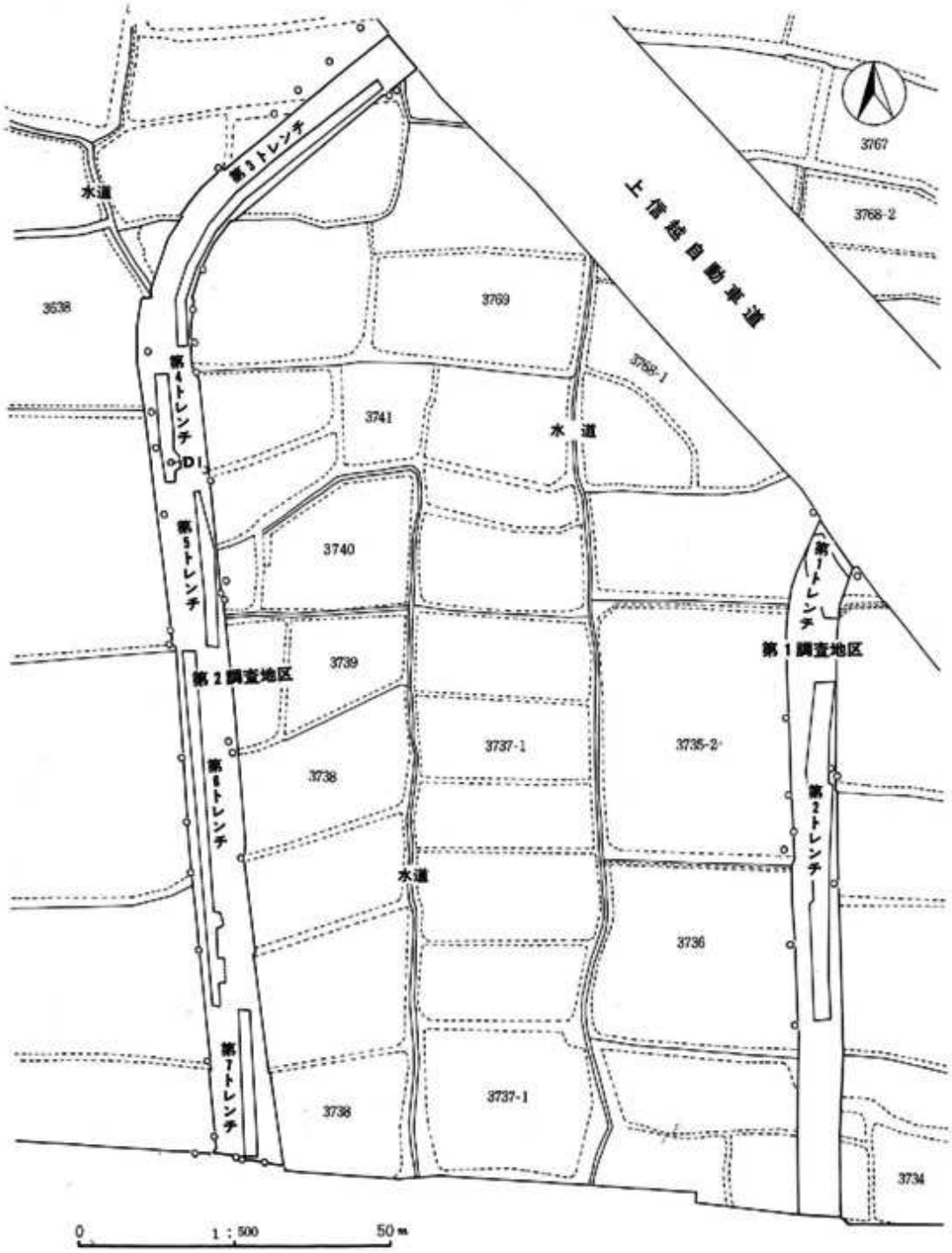
第４図　東赤座Ⅱ遺跡　第２調査区（第４トレンチ北）基本層序模式図

本調査地区の基本層序は表土・耕作土の第Ⅰ層・砂粒・小礫を含み粘性が弱く、流水の痕跡が認められる第Ⅲ～Ⅴ層・粘性があり、粒子の細かい黒色系の第Ⅵ層，地山ローム層である第Ⅶ層の４っに大別することができる。更に第Ⅰ層はⅠa（表土）、Ⅰb（耕作土）、Ⅰc（田の床土）に細分でき、第Ⅳ層は第Ⅴ層との漸移層として第Ⅳb 層、同様に第Ⅵ層も第Ⅴ層からの漸移層として第Ⅵa 層を細分した。

尚、本調査で検出された遺構は、第２調査区の遺物を持たない土坑が１基存っただけであるが、これは、第Ⅶ層黄褐色ローム層の上面で、確認することができた。



第5図　東赤座II遺跡の地形及び発掘区設定図（1：2500 佐久市基本図9による）



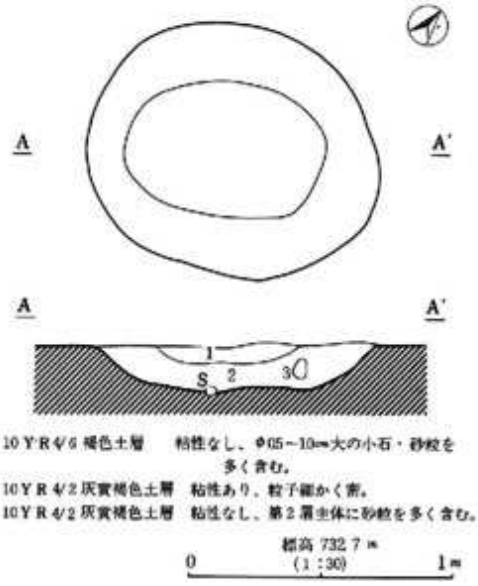
第6図東赤座II遺跡遺構全体図

第Ⅳ章　遺構と遺物

第1節　土 坑（第7図、図版二）

本遺跡からは、1基の土坑が検出されており、第2調査地区第4トレンチ南端に位置している。平面形はN－71°－Wに長軸を持つ楕円形で、長軸長110cm、短軸長は94cmを測る。断面形は、約30°のなだらかな立ち上がりを呈し、平坦な底面までの深度は約18cmである。

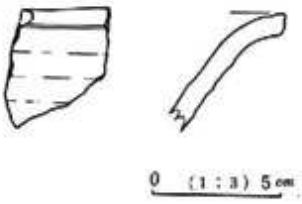
覆土は3層に分割でき、第1層はφ0.5～1.0cm大の小石粒を主体とし、粘性を持たない褐色土層。第2層は、粒子が細かく、粘性のある灰黄褐色土層で、第1層とは様相を異にし、第4トレンチ基本土層中第Ⅴ層と類似した土質である。第3層は、第2層中にφ約8cmのブロック状に認められ、第2層を主体とするが砂粒子を多量に含み、粘性を持たない灰黄褐色土層として分割した。これら、第1層、第2層はレンズ状の堆積状態を示し、自然埋土として理解できるものである。尚、遺物の出土は皆無であり、時期・性格については言及できない。



第7図　第1号土坑実測図

第2節　耕作土出土遺物（第8図）

東赤座II遺跡第1調査区第1トレンチ耕作土中より、2片の陶磁器片が出土している。図化し得た1点は、自然釉の付着したロクロ成形される陶器で、胎土は灰白色（5Y7/1）を呈し、カメ型器形になると思われる。時期に関しては判然としないが、中世の所産と考えられる。図化し得なかったものは、橙色（25YR6/6）の胎土をした厚手の土器で、器形・時期はともに不明である。



第8図　耕作土出土遺物実測図

第Ⅴ章　調査のまとめ

東赤座Ⅱ遺跡は、大遺跡群である栗毛坂遺跡群に包含されるため、当初は相当数の遺構の存在が予想されていたわけであるが、今回の調査において検出された遺構は時期・性格不明の土坑1基のみであり、遺物も時期の判然としない陶磁器片が耕作土中より出土したのみである。このように東赤座Ⅱ遺跡は予想に反して、遺構・遺物の存在は極めて稀薄であり、長野県埋蔵文化財センターの調査による西赤座遺跡や上信越自動車道路線区の東赤座Ⅱ遺跡と接する箇所における遺構の存在が稀薄であったことを考え合わせると、今回調査を行った地区は、湯川縁りから広がる遺跡群の丁度切れめにあたることが言えるわけである。従って、栗毛坂遺跡群の西限がより明確になったことになり、換言するならば、耕地整備により幾分低くなっている程度にしか見えない現地形からは読みとれないような地形の変化が、東赤座Ⅱ遺跡の東方にあったことを示唆していると言えよう。

1．東赤座II遺跡遠景（西方より）

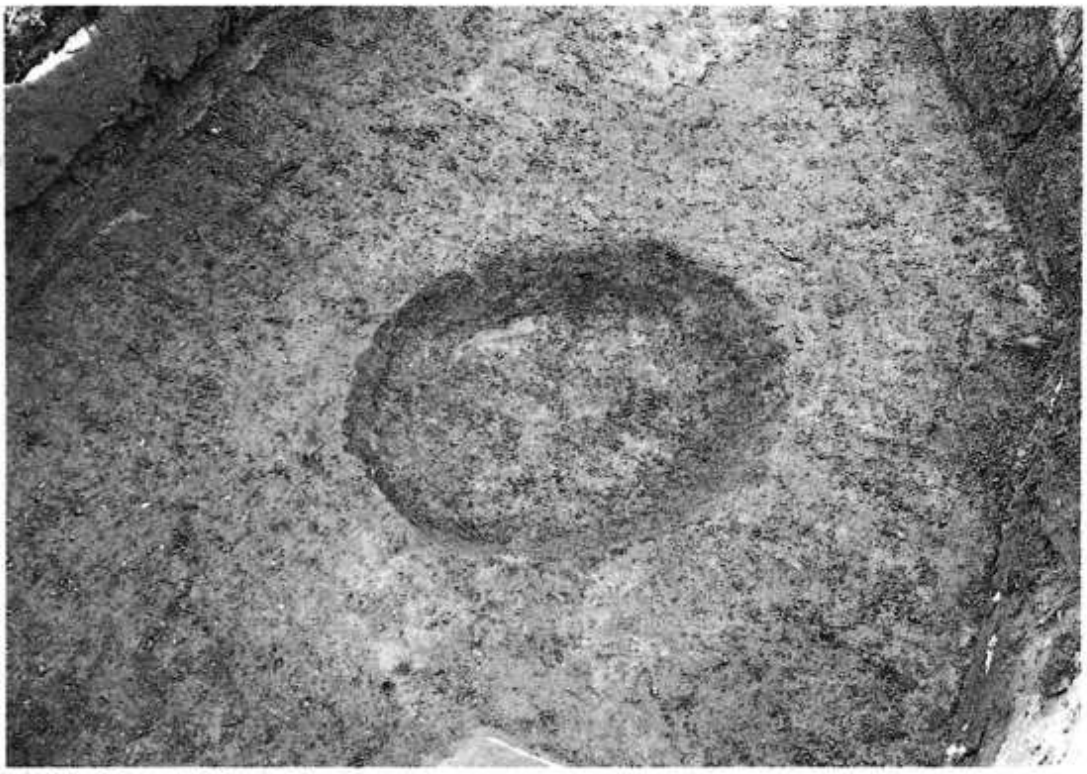
2．第1地区第1トレンチ（南方より）

3．第1地区第2トレンチ（北方より）

4．第1地区第2トレンチ(北方より)

5．第2地区第3トレンチ(南方より)

6．第2地区第4トレンチ(北方より)



7．第1号土坑（南方より）

8．第2地区第3トレンチ（南方より）

9．第2地区第3トレンチ（北方より）

10．第2地区第5トレンチ（南方より）

11．第2地区第5トレンチ（南方より）

12. 東赤座II遺跡遠景（南方より）

13. 第2地区第4トレンチ（南方より）

14. 第2地区第6トレンチ（北方より）

15. 第2地区第7トレンチ（南方より）

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第1集	『西表・竹田窯』（TNU NTM）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第2集	『池畑・西御倉』（YIT YMM）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第3集	『芝　　間』（ISM）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第4集	『新　　町 II』（IIM）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第5集	『宿上屋敷、下川原・光明寺』（YKY YSK）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第6集	『浅瀬・屋敷前・西片ケ上・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅰ』（KAB KYM KNU KMOⅢ KMOⅠ）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第7集	『高師町・西大久保』（ATM SNO）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第8集	『北西の久保』（IKK）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第9集	『梨　の　木』（NNN）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第10集	『菅田Ⅲ・新町Ⅲ・宮の上・中曽根・藤塚』（IIS IIMⅢ YMM INN TFK）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第11集	『長峯古墳群』（UNM）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第12集	『西林ぶた』（KNN）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第13集	『藤沢・高石』（NAZ IET）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第14集	『滝の峯古墳群』（TNM）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第15集	『原巻・西大久保Ⅱ、曲尾Ⅱ』（SKM SNOⅡ KMOⅡ）

長野県佐久埋蔵文化財調査センター報告書第16集
長野県佐久市荒田・上金井，東赤座Ⅱ遺跡

1989年3月
編　集　者　佐久埋蔵文化財調査センター
発　行　者　長野県佐久市教育委員会
印　刷　所　信毎書籍印刷株式会社